福井県埋蔵文化財調査報告　第154集

堂山城跡・谷口西谷古墳群

― 中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査　15 ―

２０１４

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序　　文

本書は、吉田郡永平寺町谷口地区において中部縦貫自動車道建設事業に伴い、平成23年度に調査を実施した、堂山城跡および谷口西谷古墳群の発掘調査報告書です。

堂山城跡は、永平寺町谷口集落の南山麓に位置しています。遺跡推定範囲内には、発掘調査以前から古墳状の高まりや堀切が存在することが知られていました。古墳は中世山城に伴う造成もあって明確にすることはできませんでしたが、背後の城山に所在する波多野城の出城とも考えられる堀切を伴った平坦面を確認しました。

谷口西谷古墳群は、永平寺町谷口集落の南東に位置しています。工事予定地の周囲では墳丘状の高まりが確認でき、これらに関連する遺構が存在する可能性があり調査を実施しました。しかしながら、古墳や墳墓と直接結びつく遺構の確認には至りませんでした。

両遺跡の調査では、大きな成果を収めることはできませんでしたが、本書が今後、地域の歴史研究に寄与するとともに、各方面で多くの方々に活用される一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書の刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、多くの皆様がたから多大なご支援とご協力を賜りましたことに、厚くお礼申し上げます。

平成26年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所長　畠中清隆

例　　言

1　本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが中部縦貫自動車道建設事業に伴い、平成23年度にかけて発掘調査を実施した堂山城跡（福井県吉田郡永平寺町谷口字堂山所在）、および谷口西谷古墳群（福井県吉田郡永平寺町谷口所在）の発掘調査報告書である。

2　両遺跡の調査は、国土交通省近畿地方整備局福井河川国道事務所の依頼を受けて福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、堂山城跡は宮崎認、藤本康司、谷口西谷古墳群は杉山拓巳、堀口悟史が担当した。

3　堂山城跡の発掘調査は、平成23年(2011)7月1日から11月30日まで実施した。谷口西谷古墳群の発掘調査は、平成23年（2011）9月1日から10月31日まで実施した。整理作業は、平成24年（2012）4月2日から平成26年（2014）3月14日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。

4　本書の編集・執筆は、宮崎が当たり、第4章及び第5章2を杉山が分担執筆した。

5　両遺跡に係るこれまでの成果の発表のうち、本書との間に齟齬がある場合は本書をもって訂正したものと了解されたい。

6　遺構・遺物の図化・図版作成は、宮崎・杉山・藤本・堀口が当たった。同写真撮影は、宮崎・杉山が当たった。

7　本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。

8　本書に掲載した地形図および遺構図は、堂山城跡については株式会社日新企画設計に、谷口西谷古墳群については株式会社ジビル調査設計に委託して作成したものを一部改変して使用した。

9　本書の挿図の縮尺は個々に添付している。

10　本書における水平レベルの表示は、海抜高（m）を示し、方位は座標北（G・N）を用いた。一部真北（T・N）も併用した。真北については図中に記載している。また、X・Y座標値は、国土方眼座標系第Ⅵ系に基づく。

11　発掘調査に際しては、次の方々および機関のご協力を得た（敬称略）。

永平寺町谷口地区・永平寺町教育委員会

12　発掘調査ならびに本書の作成に当たり、次の方からご助言・ご指導を頂いた（敬称略）。

月輪　泰

13　発掘調査には、地元の方々の参加・ご協力を得た。遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理作業員が当たった。

14　遺構の略記号は、次のとおりである。

SD（堀・溝）、SK（土坑）、SP（柱穴・小穴）、SX（その他）

目　　次

第１章　調査の経緯 …… 1
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の経過 …… 2

第２章　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 3
第１節　地理的環境 …… 3
第２節　歴史的環境 …… 5

第３章　堂山城跡 …… 7
第１節　調査の経過 …… 7
第２節　遺跡の概要 …… 7
第３節　遺構 …… 10
第４節　遺物 …… 14

第４章　谷口西谷古墳群 …… 15
第１節　調査の経過 …… 15
第２節　調査の方法と成果 …… 15
第３節　遺構 …… 20

第５章　まとめ …… 22

写真図版目次

図版第１　遺跡（堂山城跡）　(1) 遺跡遠景　(2) 調査区全景
図版第２　遺構（堂山城跡）　(1) SX1・SK3　(2) SD1 土層堆積状況
図版第３　遺構（堂山城跡）　(1) SD5・6　(2) SD7
図版第４　遺物（堂山城跡）　土師器・白磁
図版第５　遺跡（谷口西谷古墳群）　(1) 調査前全景　(2) 調査前全景
図版第６　遺構（谷口西谷古墳群）　(1) 段状遺構　(2) SK1

挿 図 目 次

第１図　福井県の地形区分図 …… 4
第２図　志比地溝内の地形模式図 …… 4
第３図　周辺の遺跡分布図 …… 6
第４図　現況測量図 …… 8
第５図　遺構実測図 …… 9
第６図　調査区土層実測図 …… 11～12
第７図　遺構土層断面図 …… 13
第８図　遺物実測図 …… 14
第９図　現況測量図 …… 16
第10図　調査区平面図 …… 17
第11図　自然石分布状況 …… 17
第12図　調査区土層断面図（1） …… 18
第13図　調査区土層断面図（2） …… 19
第14図　段状遺構実測図 …… 20
第15図　SK1・SP1実測図 …… 21

表 目 次

第１表　周辺の遺跡一覧表 …… 6

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

堂山城跡は、福井県吉田郡永平寺町谷口に所在する、中世山城跡および古墳の存在が想定される複合遺跡である。また、谷口西谷古墳群は、同町谷口に所在する墳丘墓または古墳群である。

昭和62年（1987）に、国の道路審議会の答申により高規格幹線道路網の整備が計画され、県内では、福井市から長野県松本市を結ぶ中部縦貫自動車道の整備が具体化し始めた。この道路は、一般国道158号線の自動車専用道路として計画され、総延長は約160kmにおよぶ。路線は、北陸自動車道福井北インターチェンジを起点として九頭竜川左岸を東進し、一般国道158号に沿う形で岐阜県内を通過して長野県松本市に至るものである。県内については、「永平寺大野道路」と称する福井市玄正島町の北陸自動車道福井北インターチェンジから大野市中津川に至る延長26.4kmの区間について、事業着手することとなった。

工事は、本線に先立ち、並行する一般国道364・416号のバイパス道建設から着手された。工事に伴い、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、埋文センター）は、平成元年（1989）から同３年にかけて永平寺町諏訪間興行寺遺跡[1]、同７年（1995）から同８年（1996）にかけては同町袖高林古墳群[2]の発掘調査を実施した。また、この間平成元年以降、埋文センターによる詳細分布調査が実施され、平成６年（1994）６月には、「永平寺大野道路」区間の遺跡分布状況が、一応確定した。その後、中部縦貫自動車道の計画が、福井市から勝山市に至る区間で具体化し、路線内に存在する遺跡の試掘調査と発掘調査が本格化した。平成10年（1998）に開始された勝山市鹿谷町保田城山古墳群の発掘調査以降、勝山市から旧上志比村（現永平寺町）にかけての区間に存在する遺跡の調査が優先された。

福井県教育庁文化課（現生涯学習・文化財課。以下、文化財課）と埋文センターは、建設省近畿地方建設局福井工事事務所（現国土交通省近畿地方整備局福井河川国道事務所。以下、国土交通省）と協議し、本格的発掘調査として、先ず平成10年７月から同11年（1999）７月にかけて、勝山市鹿谷町保田城山古墳群[3]の調査を実施した。この間、国土交通省の工事計画が勝山インター優先となり、引き続き平成11年８月から同町発坂山ノ端遺跡[4]、同年11月からは同町志田神田遺跡[5]の調査に着手した。また、平成11年には、永平寺町の旧上志比村城でも工事計画が進展し、埋文センターは、同年８月から市荒川興行寺遺跡[6]、翌12年度には藤巻館跡[7]および浅見金道口遺跡[8]の発掘調査に着手した。

以後、平成13年度は三重山城跡[9]（旧永平寺町）、同14年度は諏訪間興行寺遺跡[10]（旧永平寺町）、栗住波谷口遺跡[11]（旧上志比村）、藤巻多珍坊遺跡[12]（同）、同15年度は吉野堺大明地遺跡（旧松岡町）、大月前山遺跡[13]（旧上志比村）、浅見東山遺跡[14]（同）と、用地買収が完了した箇所から順次調査に着手した。

こうした中、平成15年度には具体的な供用開始時期の検討が始まり、国土交通省は文化財課と協議し、北陸自動車道福井北インターチェンジから永平寺西インターチェンジ間の１工区と、上志比インターチェンジから勝山インターチェンジ間の３工区の調査を優先することとなった。このため、平成16年度以降、竹原弁財天遺跡[15]（旧上志比村）、平成18年度に東ノ館跡・新右衛門館跡・西ノ館跡[16]（旧上志比村）、浅見堂ノ北遺跡（同）、平成19年度に太田・小矢戸遺跡（大野市）、平成20年度に２回目の藤巻館遺跡（旧上志比村）の調査が行われた。

旧永平寺町内の２工区の用地買収が遅れていたが、平成22年（2010）の春には試掘調査が可能な状

況となった。文化財課・埋文センターは、国土交通省と協議し、永平寺町区間の６遺跡の試掘調査を、平成22年の夏に行った。試掘調査の結果、堂山城跡および谷口西谷古墳群の２遺跡において、埋蔵文化財が工事による影響を受ける可能性があり、本格調査が必要と判明した。この結果を受けて、文化財課・埋文センターは国土交通省と協議し、平成23年（2011）７月より堂山城跡から調査を開始した。

第２節　調査の経過

試掘調査は、平成22年の夏に実施された。猛暑の中、堂山城跡では、遺物は出土しなかったが、尾根を横断する堀切と前方後円形の高まりを確認した。また、高まりの周囲には溝がめぐっている状況を確認したことから、本調査が必要であると判断した。本調査範囲を確定するために、遺構を確認した範囲から北および南にトレンチを新たに設定し、調査必要範囲を確定した。結果、本調査必要面積は930㎡となった。

谷口西谷古墳群においても、工事予定範囲内の南側トレンチで溝状遺構（SK1）を確認した。遺物は出土しなかったが、工事区域の南側に存在する古墳または墳墓状の高まりとSK1が関連すると考えられ、本調査対応と判断された。なお、工事区域の北側にも円形の高まりが存在するが、これに伴う遺構は対象地内では確認できなかった。結果、南側の遺構確認部分のみを調査対象とした。本調査必要面積は350㎡である。

両遺跡ともに、工事区域の外側に遺跡が続いている。これまでの中部縦貫自動車道関連調査において同様の状況の際には、山地部では重要な情報である遺跡が立地する地形把握のため、現況測量を行っている。その面積は、堂山城跡では用地取得範囲に限定した3,400㎡、谷口西谷古墳群では用地取得範囲外を含めた1,300㎡である。調査の経過、方法の詳細については、各遺跡の項で記載する。

註

(1)　冨山正明編2008『諏訪間興行寺遺跡－国道416号線改良工事に伴う緊急調査－』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

(2)　赤澤徳明編1999『袖高林古墳群－中部縦貫自動車道および国道364号道路改良工事に伴う調査－』同上

(3)　清水孝之編2002『城山古墳群－中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査１－』同上

(4)　清水孝之編2004『発坂山ノ端遺跡－中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査３－』同上

(5)　坪田聡子編2009『志田神田遺跡－中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査８－』同上

(6)　月輪泰編2004『市荒川興行寺遺跡－中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査２－』同上

(7)　月輪・宮崎認編2007『藤巻館遺跡－中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査５－』同上

(8)　鈴木篤英編2006『浅見金道口遺跡・三重山城跡・浅見東山遺跡－中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査－』同上

(9)　註(8)に同じ。

(10)　田中勝之編2012『諏訪間興行寺遺跡Ⅱ－中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査11－』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

(11)　青木隆佳編2007『栗住波谷口遺跡－中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査６－』同上

(12)　山本孝一編2008『藤巻多珍坊遺跡－中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査７－』同上

(13)　宮崎認編2011『大月前山遺跡－中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査10－』同上

(14)　註(8)に同じ。

(15)　河村健史編2010『竹原弁才天遺跡－中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査９－』同上

(16)　月輪泰編2013『東ノ館跡・新右衛門館跡・西ノ跡－中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査12』同上

第２章　遺跡の地理的･歴史的環境

堂山城跡および谷口西谷古墳群は、福井県北部の吉田郡永平寺町谷口に所在する。本章では、本遺跡の所在する永平寺町谷口地区の地理的環境および歴史的環境について、概略ながら記述したい。

第１節　地理的環境

福井県は、本州中央部の凹部に位置し、西側は日本海に面している。東西約130km、南北約100kmを測り、面積は、約4,189km^{2}を測る（第１図）。

福井県は、敦賀市の北東部にある木ノ芽山嶺を境として、行政的には北を嶺北地方、南を嶺南地方と呼称する。現在では嶺南地方に含まれている敦賀市から以北を、近代以前には越前国、敦賀市を除く嶺南地方を若狭国として区分していた。福井県は、北は加越山地で石川県と、南東は越美山地で岐阜県と接し、南西から西方にかけては野坂山地・若丹山地で滋賀県および京都府と境を接する。福井県の嶺北地方は、あまり凹凸のない海岸線を有するものの、東尋坊や呼島門のような切り立った岩肌が連なり、奇岩の景勝地として知られる。一方の嶺南地方は、細くのびる半島が複雑に入り組む日本海側有数のリアス式海岸を形成している。

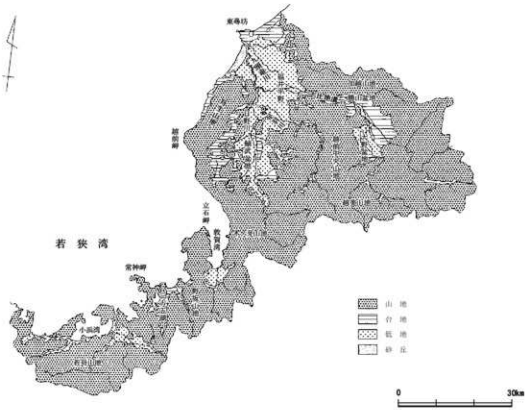
嶺北地方は、周囲の多くを山地に囲まれ、唯一北西で日本海に開く。各山地より流れ出る九頭竜川・足羽川・日野川等の主要な河川は、この開口部に向かって集まる。平野の大部分は、これら主要３河川によって形成された沖積平野であり、九頭竜川流域では大野・勝山の盆地および坂井平野が、足羽川流域では福井平野が、日野川流域では鯖武盆地がある。この平野部は、嶺北地方中央部に占地する越前中央山地により、東側の大野・勝山盆地と西側の鯖武盆地・福井平野・坂井平野とに視覚的に分けられ、両地は僅かに越前中央・加越両山地間に生ずる幅約1.5kmの志比地溝により連結されている（第２図）。

志比地溝は、勝山市西部から松岡町に至る長さ約13kmの地溝である。地溝中央部には九頭竜川が西流しており、加越・越前中央両山地より流出する中小の河川が、小規模な扇状地を形成しつつこれに注いでいる。

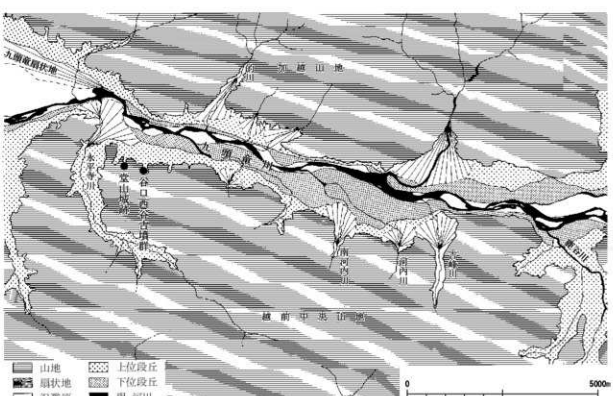
九頭竜川両岸には、大別して２段の河岸段丘が形成されており、勝山盆地内とともに河岸段丘の発達した地形となっている。地溝内に点在する遺跡は、この２段の河岸段丘のうち標高約50～80mを測る上位河岸段丘面および山麓部に立地する例が多い。

永平寺町谷口地区は、九頭竜川左岸、志比地溝の南西部を占め、上位段丘上に位置する。越前中央山地の北西派生丘陵が背後にそびえる。現在では、大きな河川は確認できず、小渓谷から広がる扇状地形は見かけることができるが、広範囲に広がる大きな扇状地形は確認できない。

谷口西谷古墳群が東側、堂山城跡が西側に位置するが、両遺跡ともに、この段丘の南側、越前中央山地の城山から派生する低丘陵群の尾根上に立地している。南を城山の山稜にさえぎられているが、東・西・北は開けており、遠くまで眺望が届く環境である。



第１図　福井県の地形区分図（縮尺1/1,000,000）



第２図　志比地溝内の地形模式図（縮尺1/100,000）

第２節　歴史的環境

本遺跡の所在する永平寺町東部の旧上志比村域では、福井県教育委員会による県内全域にわたる詳細分布調査や、中部縦貫自動車道建設工事計画路線内での分布調査により、新たに多数の遺跡の存在が確認された。また、本遺跡をはじめ、埋文センターが実施した発掘調査により、新しい事実も判明しつつある。ここでは、これまでの成果をもとに、本遺跡周辺に所在する遺跡の概要を記す（第３図）。

縄文時代　河岸段丘や扇状地上に立地し、草創期から遺跡が存在する。鳴鹿山鹿遺跡（35）では有茎尖頭器等が一括して出土した。中期では、下浄法寺遺跡（37）で大杉谷式の釣り手土器が出土している。後期では、鳴鹿手島遺跡（36）で石囲炉をもつ竪穴住居が検出されている。晩期では、成仏木原町遺跡（23）で土器棺墓等が多数検出されている。

弥生時代　後期後半から古墳時代初頭の墳丘墓や集落が少数みられる。墳丘墓は尾根上や裾に造営され、集落は墳丘墓周辺の河岸段丘上に立地する。乃木山墳丘墓（11）では素環頭鉄剣等が出土し、南春日山墳丘墓群（13）では、四隅突出墓や方形墳丘墓が検出されている。袖高林古墳群（26）では方形墳丘墓が検出され、鉄刀や装飾器台が出土している。室遺跡（2）は環濠集落と推定され、竪穴住居や掘立柱建物が多数検出されている。

古墳時代　九頭竜川を望む尾根上を中心に古墳が多数造営される。松岡古墳群（9）は前方後円墳10基を含む総数約50基からなる、越前を代表する古墳群である。４世紀後半以降、手繰ヶ城山古墳、泰遠寺山古墳、鳥越山古墳、石船山古墳、二本松山古墳等巨大古墳が造営される。６世紀には古墳群は衰退し、周辺に円墳を中心とした小古墳群が造営される。

古代　奈良時代から平安時代にかけての窯跡や集落が存在する。堂谷窯跡群（28）では、８世紀前半とされる窯遺構の一部や須恵器が出土している。吉野堺大明地遺跡（5）では、掘立柱建物が多数検出され、建物群が計画的に配置されていたと推定されている。円面硯や土馬、畿内系の暗文土器が出土し、公的機関の存在が推定される。

中世　志比荘は平安時代末期に最勝光院領としてはじまり、九頭竜川左岸に荘園領を有していた。承久の変（1221）後、鎌倉幕府御家人の波多野義重が地頭となった。曹洞宗大本山永平寺（33）は、波多野氏の勧請を受け、道元が寛元元年（1243）に道場を建てたことに始まる。また、波多野氏は土着化し、16世紀には朝倉氏の被官となった。波多野氏館跡（30）では、土塁の一部が残存する。波多野城跡（31）は、南北朝時代に築城され、室町時代後期には改修されたと考えられている。山頂部分を中心に曲輪や土塁、堀切、竪堀が確認できるが、全容は解明されていない。堂山城跡は、この波多野氏館跡の南西に位置し、波多野城跡を構成する出城の一部であると考えられる。

引用・参考文献

青木隆佳編 2007『栗住波谷口遺跡－中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査６－』福井県教育庁理蔵文化財調査センター

上志比村 1978『上志比村史』

河村健史編 2010『竹原弁才天遺跡－中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査９－』福井県教育庁理蔵文化財調査センター

工藤俊樹編 1988『鳴鹿手島遺跡』同上

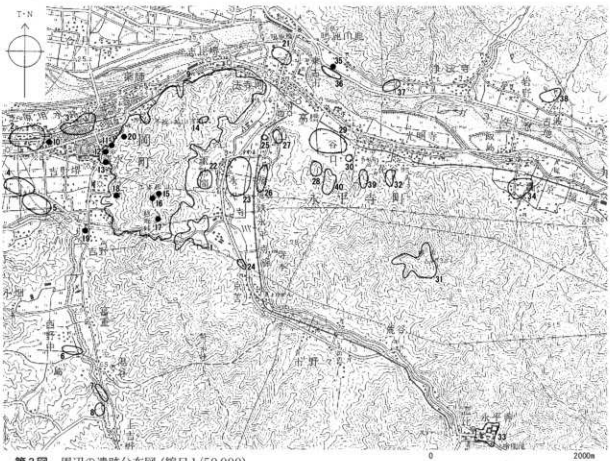
鈴木篤英編 2006『浅見金道口遺跡・三重山城跡・浅見東山遺跡－中部縦貫自動車道建設に伴う調査－』同上

月輪　泰編 2004『市荒川興行寺遺跡－中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査２－』同上

月輪　泰 2008「東ノ館跡・新右衛門館跡」『年報22　平成18年度』同上

月輪　泰 2009「西ノ館跡・西ノ館城跡」『年報23　平成19年度』同上

月輪泰・宮崎認編 2007『藤巻館遺跡－中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査５－』同上
日本地誌研究所編 1970『日本地誌』第10巻
福井県教育委員会 1993『福井県遺跡地図』
宮崎　認 2008「浅見堂ノ北遺跡」『年報22　平成18年度』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
山本孝一編 2008『藤巻多珍坊遺跡－中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査７－』同上



第３図　周辺の遺跡分布図（縮尺1/50,000）

第１表　周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	主な時代	種別	番号	遺跡名	主な時代	種別
1	諏訪間興行寺遺跡	中世	寺院跡	21	東吉市縄手遺跡	弥生・古墳	集落跡
2	室遺跡	弥生・古墳	集落跡	22	諏訪間窯跡群	古墳	窯跡
3	奥遺跡	古墳	集落跡	23	成広木原町遺跡	縄文・弥生・古墳	集落跡
4	吉野埋桑下遺跡	縄文・平安	集落跡	24	京善藤谷口遺跡	平安	集落跡
5	吉野埋大明地遺跡	旧石器・奈良・平安	集落跡	25	東諏訪間古遺跡	古墳	古墳
6	猪谷田畑遺跡	縄文・中世	集落跡	26	袖高林古墳群	弥生・古墳	墳丘墓・窯跡
7	湯谷砂田遺跡	平安	集落跡	27	大畑窯跡群	古墳	窯跡
8	上吉野成善田遺跡	縄文・奈良・平安	集落跡	28	堂谷窯跡群	奈良	窯跡
9	松岡古墳群	弥生・古墳	墳丘墓・古墳	29	木矯遺跡	旧石器	散布地
10	泰遠寺山古墳	古墳	古墳	30	波多野館跡	中世	館跡
11	乃木山墳丘墓	弥生・古墳	墳丘墓	31	波多野城跡	中世	城跡
12	春日山古墳	古墳	古墳	32	三重山城跡	中世	城跡
13	南春日山墳丘墓群	弥生	墳丘墓	33	永平寺	中世～現代	寺院
14	手縄ヶ城山古墳	古墳	古墳	34	轟遺跡	縄文	散布地
15	石舟山古墳	古墳	古墳	35	鳴鹿山鹿遺跡	縄文	散布地
16	鳥越山古墳	古墳	古墳	36	鳴鹿手島遺跡	縄文	集落跡
17	二本松山古墳	古墳	古墳	37	下浄法寺遺跡	縄文	散布地
18	檜ノ木坂５号墳	古墳	古墳	38	吉波神社窯跡	平安	窯跡
19	吉野八幡神社古墳	古墳	古墳	39	谷口西谷古墳群	弥生・古墳	墳丘墓・古墳
20	弁財天谷窯跡	古墳	窯跡	40	堂山城跡	古墳・中世	城跡

第３章　堂山城跡

第１節　調査の経過

発掘調査は平成23年７月から着手した。調査前の調査範囲の状態は、山林で杉の植林が部分的に行われていた。調査地までは山林を徒歩で登っていく必要があるため、本線用地内の急斜面に進入路の階段を構築する作業から取り掛かった。現況測量を行うため、対象範囲の清掃を行い、７月21日に現況測量を行った（第４図）。現況測量前に調査範囲のグリッドを設定した。グリッドは１辺10m四方で、国土座標と一致する方眼である。東西を西からＡ～Ｃ、南北を北から１～３と設定した。

現況測量後は、調査前の状況を写真撮影した。その後、調査区を縦横断する土層観察用の畦を南北１箇所、東西２箇所設定し、表土掘削を開始した。排土は調査区の東西斜面に、土嚢を用いて排土流出防止用の防壁を増設しながら行った。このため、表土・流土の掘削は８月末まで続いた。

９月からは確認できた遺構について掘削を行った。表土掘削の段階で、墳丘状の高まりの周囲には溝が廻ることが判明していたが、これが全周せず、途切れる部分が存在することが明らかとなった。平坦面で方形の掘り込み（SX1）と土坑（SK3）を確認し、これについて慎重に掘削を行ったが、埋葬施設に関連する遺物は確認できなかった。

10月19日には、ラジコンヘリによる測量と全景撮影を行った。その後、盛土範囲の掘削を開始した。盛土下の地山面に遺構が存在することが明らかとなり、これの補足調査等を行い、11月末に調査を終了した。

第２節　遺跡の概要

１　層序

調査区の南北および東西の土層実測図が第６図である。本遺跡の位置する尾根は、明赤褐色の地山、岩盤の上に、地山由来の風化層が堆積している。その上に一部水平に盛り上げられた褐色の盛土層が確認できた。

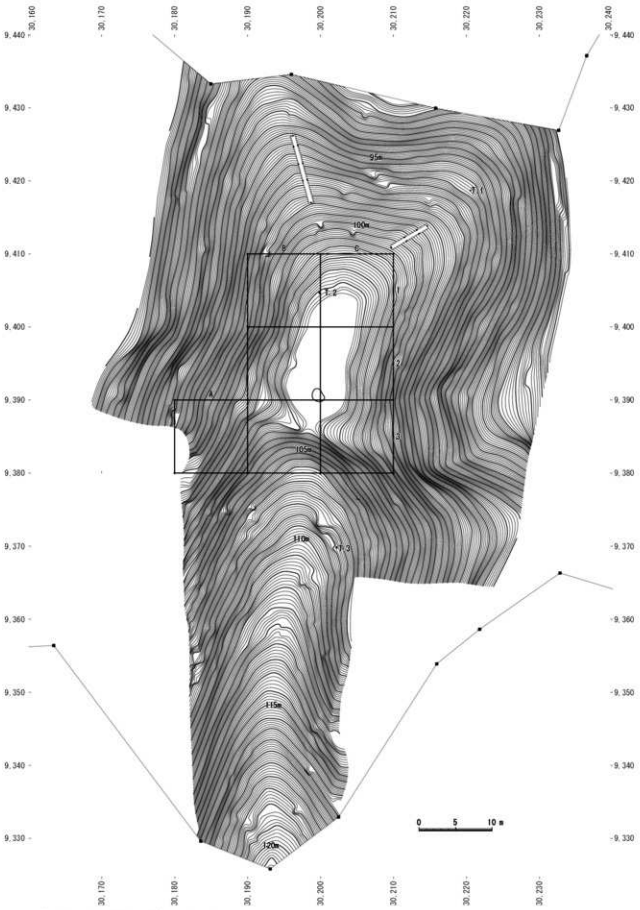
SD1の部分は、本来尾根として連続していたはずであるが、これを掘削する際に出た土を盛り返したものであると推定できる。こうした盛土層は、北側のSD2付近まで広がりが確認できた。この付近の盛土層下からは部分的に黒色の腐植土層が確認できた。また、SK4、SD5～７はこの盛土層直下の地山層に構築されており、この盛土が人為的に行われたことを示している。

盛土層の上は、盛土の流土が0.05～0.10m程度の厚さで堆積しており、表面が腐植土層の表土で覆われていた。

２　遺構・遺物の分布

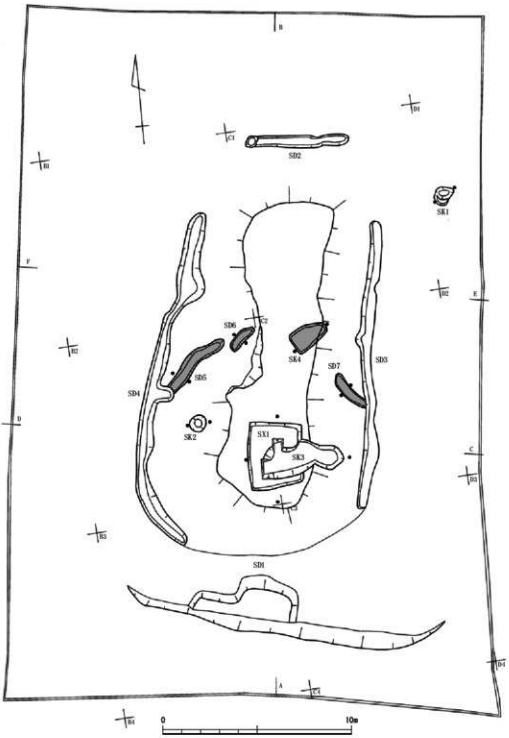
本遺跡で確認できた遺構は溝７基、土坑５基、墳丘状の高まり（曲輪）１基である。これらの実測図が第５図である。

南は、SD1によって尾根が分断されている。SD3・４は、墳丘状高まりの東西の対称位置に構築されている。SD2は北端に構築されており、SD3・4とは連続しない。SK1・2・3、SX1は流土直下に構築されている。SK1は地山面、SK2・3、SX1は盛土層から掘り込まれている。



第4図　現況測量図（縮尺1/500）

遺物は試掘調査段階では確認できていなかったが、調査が進捗すると遺物が出土した。復元不能な土師器片が数点存在する他、C5区の流土からは土師器壺、B3区SD4の埋土から土師器壺と白磁皿、C1区流土からも白磁皿が出土した。極めて少量であるが、居住空間が存在し難く、後世の混入が起こりにくい尾根上において、これらの遺物の存在は遺跡の時期を明確に示すものであると考えても間違いないものと思われる。



第5図　遺構実測図（縮尺1/200）

第3節　遺構

1　溝

SD1（第5･6図、図版第2）

B3区からC3区まで屋根を横断する形で掘削されている。底面はほとんど地山岩盤が露出している。第6図の断面の様に、墳丘状高まりを尾根から切り離す目的で構築されたと考えられ、本来、現存部の幅約2m程度の規模であったと推定できる。その後、中世の山城構築時に南側が大きく改変され、岩盤をほぼ垂直に掘削するほどの切岸が行われた。切岸の幅は17mにおよび、高さは最大で1.8mを測る。切岸より南の高所部を精査したが、柵列や土塁といった防御施設の痕跡は確認できなかった。

SD2（第5･6図）

C1区に位置する。墳丘状高まりの北側にあり、東西が途切れる単独の溝である。規模は長さ5.5m、幅0.7mを測る。深さは最深部でも0.25mと浅い。墳丘状高まりの流土が埋土である。底面は皿状に掘り込まれている。

SD3（第5･6図）

C1～3区に位置する。墳丘状高まりの東側にあり、南北が途切れる。規模は長さ15.5m、幅は最大で0.9mを測る。墳丘状高まりの流土が埋土である。底面は平坦で東側に立ち上がりが認められず犬走り状となる。平面形は直線ではなく、中央部で西側に緩やかに屈曲し、くびれる様子がうかがわれる。

SD4（第5･6図）

B1～3区に位置する。墳丘状高まりの西側にあり、北は完全に途切れる。南はSD1と接するが、立ち上がりが明確に認められ、連続して構築されていない。規模は直線距離で長さ17.5m、幅は最大で1.5mを測る。墳丘状高まりの流土が埋土である。底面は皿状に掘り込まれているが、一部平坦な部分も存在する。SD3よりもやや北側で屈曲し、くびれる様子がうかがわれる。南端は円形に屈曲する。SD5との接続部分は盛土におおわれており断面にSD5が確認できていたが、誤って掘削しすぎたものである。この部分はSD5に含まれる。

SD5（第5･7図、図版第3）

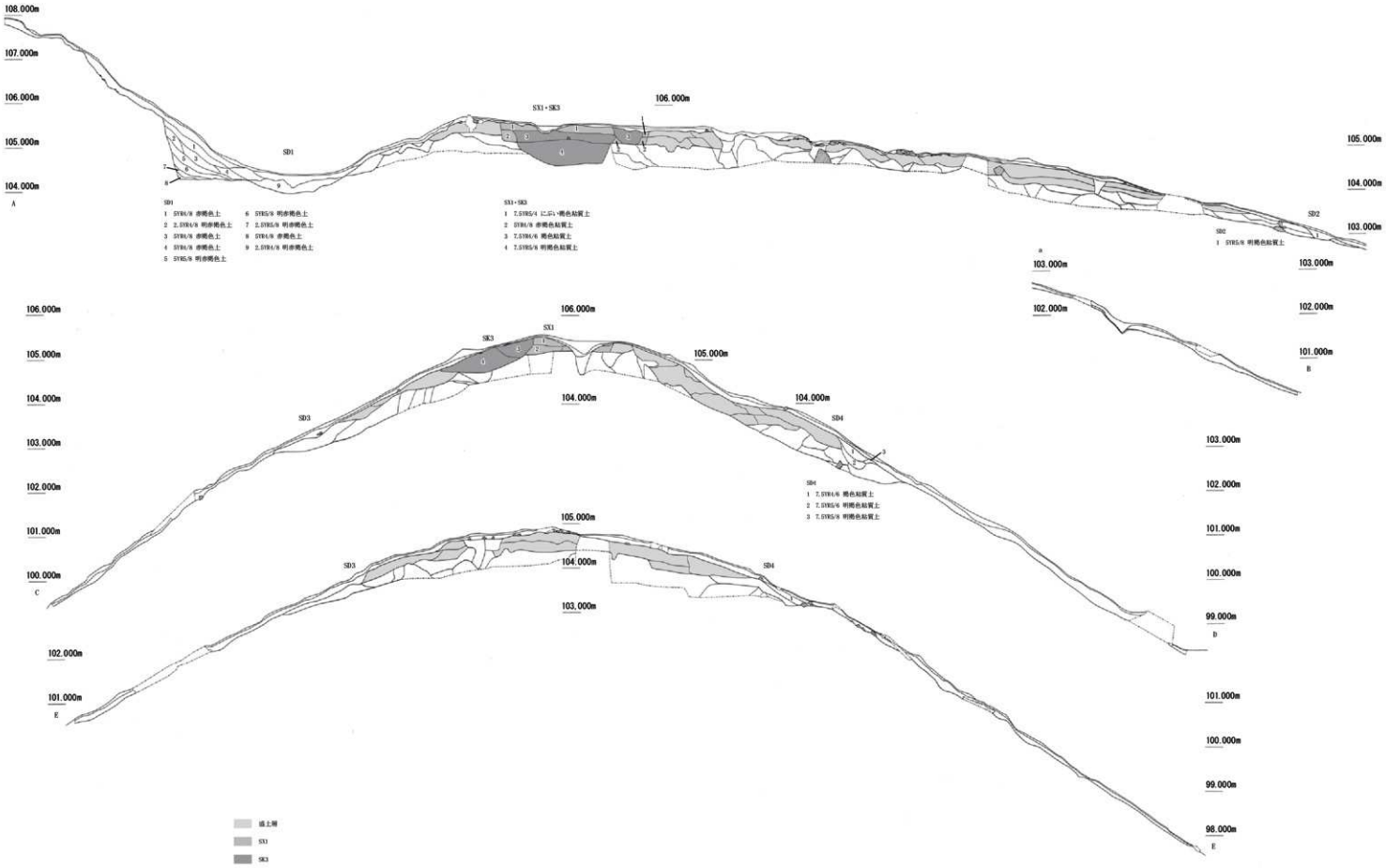
B2区に位置する。墳丘状高まりの盛土下から検出した。前述のとおり、SD4と接続するが、盛土で覆われている。SD4が機能していた段階では、SD5は埋没しており同時には機能していないと推定できる。SD4南端の円形の屈曲に呼応するように屈曲した平面形を呈する。直線距離で長さ4.9m、幅は0.6mを測る。底面は皿状ではなく平坦で、両壁の立ち上がりが垂直に近くしっかりと構築されている。

SD6（第5･7図、図版第3）

B2区に位置する。墳丘状高まりの盛土下から検出した。SD5と近接するが連続せず、単独の溝である。規模は、長さ1.7m、幅0.5mを測る。位置は微妙にずれているが、SD5と同じ方位性をもって構築されているものと推定できる。底面は皿状ではなく平坦で、両壁の立ち上がりが垂直に近くしっかりと構築されている。

SD7（第5･7図、図版第3）

C2区に位置する。墳丘状高まりの盛土下から検出した。SD3と接続するが、盛土で覆われている。SD3が機能していた段階では、SD7は埋没しており同時には機能していないと推定できる。長さは2.3m、幅は0.5mを測る。底面は皿状に掘り込まれる。



第6図　調査区土層実測図

2　土坑

SK1（第5・7図）

D1区に位置する。流土直下の地山面から掘り込まれている。隅丸方形に近い不整円形の平面形態で、直径0.9m、深さ0.25mを測る。埋土には灰や炭化物が多く含まれる。被熱硬化はしていないものの、内部で火を起こしていた可能性がある。

SK2（第5・7図）

B2区に位置する。流土直下の盛土層から掘り込まれている。円形の平面形で、直径0.7m、深さ0.2mを測る。SK1同様、埋土には灰や炭化物が多く含まれる。被熱硬化はしていないものの、内部で火を起こしていた可能性がある。

SK4（第5・7図）

C2区に位置する。墳丘状高まりの盛土下から検出した。台形状の平面形態の方形土坑で、長辺2.0m、短辺1.2m、深さ0.25mを測る。自然に埋没した状況はうかがえず、盛土に近い埋土で埋められている。

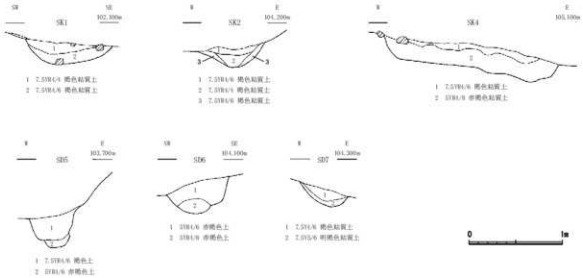
SK3・SX1（第5・6図、図版第1・2）

B2区からC2区、墳丘状高まり平坦面盛土層から掘り込まれている。SX1をSK3が上から切っている。

SX1は南北4.7m、東西2.8mの方形土坑である。底面は平坦で、深さ0.42mを測る。埋土上層はにごった褐色粘質土で、盛土とは色合いが異なっていた。埋土下層には炭化物が含まれている。埋葬施設の可能性も考慮して慎重に掘削を行ったが、埋葬施設に伴う遺構・遺物は確認できなかった。

SK3は西から東へSX1および墳丘状高まりの盛土を大きく切る形で構築されている。東西4.5mを測る不整形の土坑である。東端は円形に収束しているが、西端は2.0m程度の幅がある。埋土はやや黒味があり、周辺礫層由来の拳大の自然礫が大量に埋没していた。遺物は出土していない。

SX1が埋葬施設の残存であったとしても、深さ0.4mでは、棺の高さにも足りない。墳丘状高まりが中世段階で大きく削平され、SX1も同様に削平を受け、その後SK3が構築されたものと推定できる。



第7図　遺構土層断面図（縮尺1/40）

3　曲輪

第5図のように、長さ16m、最大幅5mの平坦面が存在する。埋葬施設関連の遺構・遺物が確認できなかったため断定こそできなかったが、前方後円墳または円墳が中世段階で大きく削平されこのような曲輪に改変されたものと推定する。平坦面の北側とSX1・SK3の構築された南側とは連続する盛土層が確認できるため、前方後円形であった可能性が高いと思われる。

第4節　遺物

本遺跡の出土遺物は、土師器数点、白磁2点である。以下図化できた遺物について報告を行う。

1　土師器（第8図、図版第4）

1は小型直口壺の口縁部である。復元口径10.2cm、残存高3.2cmを測る。内外面ともに横ナデが施されている。口縁部が微妙に内湾する。胎土は精良で、焼成も良好である。

もう1点壺の胴部片が出土しているが、胎土が異なり、別個体と考えられる。

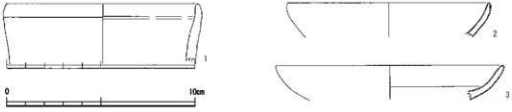
2　白磁（第8図、図版第4）

2・3は白磁皿である。2は復元口径10.6cmを測る。口縁は上方に突出し、緩やかに内湾する。陶器質の胎土に乳白色の釉がかかる。表面は細かく貫入がはいる。底部を欠くために断定できないが、森田編年D群[1]の皿と考えられ、15世紀代に属すると推定できる。3は復元口径11.9cmを測る。硬質な胎土に透明感のある釉がかかる。表面は緩やかに貫入する。底部を欠くために断定できないが、Ⅶ2またはⅧ類[2]の皿と考えられ、13世紀前半に属すると推定できる。

註

(1)　森田勉 1982「14－16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2

(2)　梅田賢次郎・森田勉 1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4



第8図　遺物実測図（縮尺1/2）

第４章　谷口西谷古墳群

第１節　調査の経過

１　調査の経過

谷口西谷古墳群は谷口地区現集落の東南に位置する。立地は越前中央山地から北方の志比谷へ向かって伸びる丘陵尾根上にある。当古墳群は中部縦貫自動車道建設予定地内を対象として当センターが実施した分布調査によって確認し、遺跡として登録した。平成22年に用地部分の本調査の必要の当否について判断するため、8月17日から20日にかけて試掘調査が行われた。試掘調査では丘陵尾根の主軸に沿って用地内に幅1m、長さ10mのトレンチを3カ所が設定し、高所に位置する南側から順に1から3の番号を付した。調査の結果、1トレンチにおいて溝と土坑それぞれ1基を検出した。1トレンチ南側の用地外には関西電力株式会社の送電線鉄塔が立てられており、その基部には古墳状の高まりが観察できた。そのため1トレンチで検出したこれらの遺構も古墳もしくは弥生時代の墳墓に関連するものである可能性が考えられた。以上の結果を踏まえ、1トレンチを中心とする用地内南側の丘陵上部分350㎡について、本調査を実施することになった。

２　発掘作業の経過

発掘調査は平成23年9月1日から10月31日までの2ヶ月間実施した。調査ではまず用地内の草木の除去と清掃を行い、現況地形の三次元測量を実施した。測量は9月7日から開始し13日に一部を残し終了した。9月8日にはローリングタワーを使用し、現況地形の調査区全景写真の撮影を行った。9月12日からは表土の掘削を開始し、10月4日から遺構の精査と掘削を行った。10月17日より掘削が終了した部分から三次元測量を実施し、19日にはすべての範囲を終了した。その後は20日に完掘後の全景写真を撮影。24日からは遺構検出面以下の土層堆積状況の確認のためトレンチの掘削を行った。31日に現地作業は予定通り完了した。

第２節　調査の方法と成果

１　調査の方法

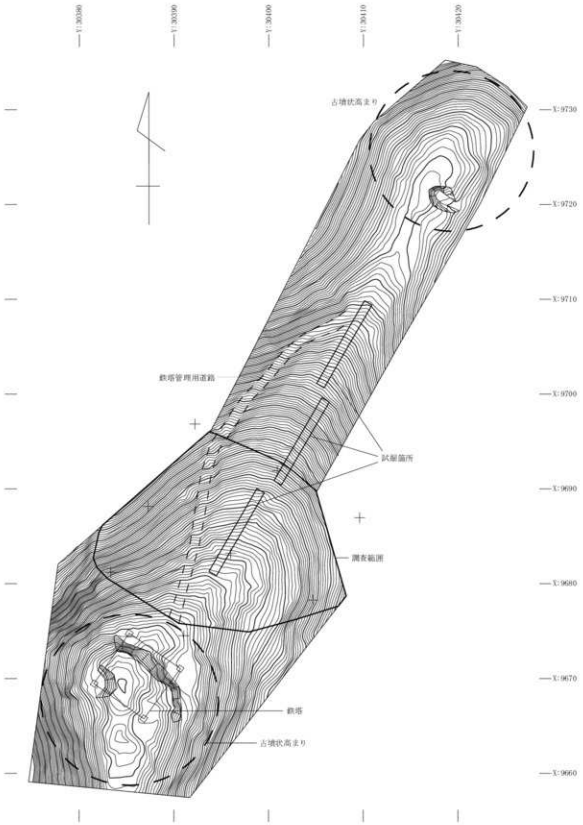
1) 発掘区

調査開始直後に基準点を設置し、尾根筋とほぼ平行する任意の方向を基軸として10m間隔のグリッドを設定し、杭8本を設置した。グリッド名称は南北方向をA ～ D、東西方向を1 ～ 4とした（第10図）。なお今回の調査において図化用の測量は調査区が高圧線の直下に位置することから、ラジコンヘリコプター等を使用した航空写真測量は行わず、トータルステーションとデジタルカメラを使用した三次元測量を採用している。

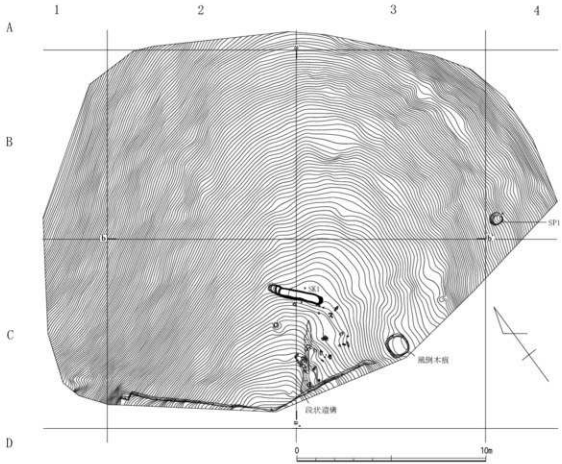
2) 発掘作業

調査範囲は国土交通省の協力により調査着手時には既に主要な立ち木の伐採が終了していた。そのため最初に必要となった作業は、枝、落葉や雑草の除去である。それらを除去した後、現況地形の測量と写真撮影を行い、掘削の作業に移行した。掘削にあたっては中央の尾根筋方向の3ラインと、それに直交するCラインの2方向に土層観察用のアゼを設定し、それ以外の部分について人力で掘り下げた。こうして表土および流土を掘削した後、基盤層である黄褐色土の上面で遺構確認のための精査を行った。検出面には大小様々な土の変色部分が確認されたが、自然に形成された窪み等を多く含むと

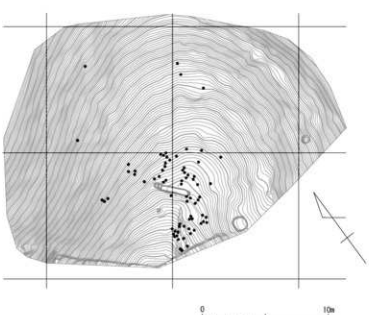
考えられたため、まず幅20cm程度のサブトレンチを掘削して断面を観察し、遺構であるかどうかの判断を行った。遺構と判断したものについては土層断面の図化と写真撮影の後に完掘を行った。



第9図　現況測量図（縮尺1/400）



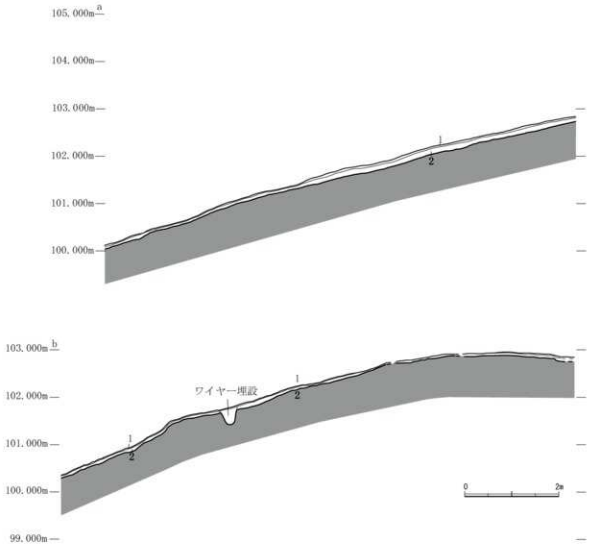
第10図　調査区平面図（縮尺1/200）



第11図　自然石分布状況（縮尺1/300）

2　層序

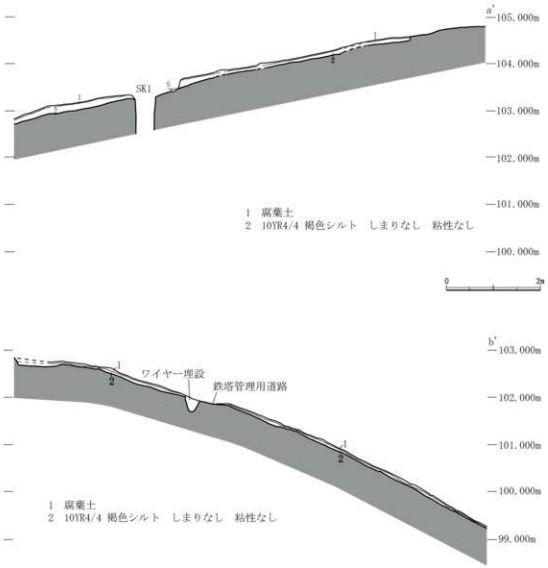
現地作業としてはまず最初に掘削前に現況地形測量を行った。測量範囲は調査範囲および、用地内の尾根上部分に加えて、用地外の南北に隣接して存在する古墳状の高まりを含めた1,300㎡を対象とした（第9図）。南側の古墳状の高まりは、送電線用鉄塔の直下に認められる。高まりの上部は、現状では一部に雑草が繁茂しているのを除いて地山が露出している状態になっており、鉄塔建設時に鉄塔基礎の部分を中心に地形の改変が行われているようである。北側の古墳状の高まりは用地境界にあたる部分に存在する。以上の2ヶ所の古墳状の高まりを観察したところ、現状では葺石等の人為的な痕跡は確認できなかった。



第12図　調査区土層断面図（1）（縮尺/80）

調査範囲の地形は北側へ向かって緩やかに下降していく尾根上部分と、北西側、南東側の両斜面から成る。両側の斜面はいずれも20～30度の勾配をもっている。東側斜面南側には標高102m前後で緩やかな段を形成する部分があり、地形図にも等高線の間隔が広がる形で現れている。この部分は東西方向断面図（第13図下段）に示したようにワイヤーが埋め込まれていた部分でもあることから、人為的に改変されて生じた地形であると考えられる。

調査区の土層堆積は表土である腐植土層の下に褐色土が堆積しており、その下に黄褐色の基盤層が認められた（第12･13図）。表土から基盤層上面までは10～15cmで達した。



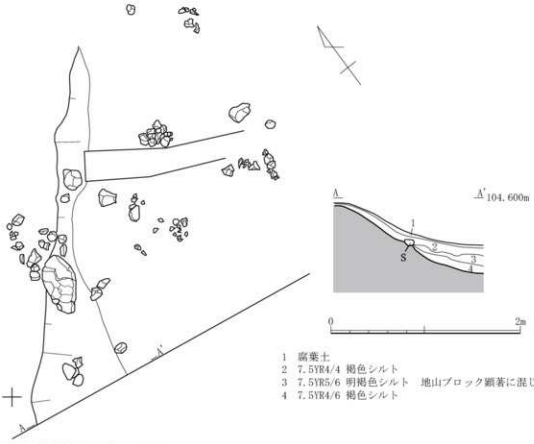
第13図　調査区土層断面図（2）（縮尺1/80）

第3節　遺構

表土および流土を掘削した段階で地山である黄褐色土層の上面を精査し、遺構の確認を行った。その結果地山とは異なる色調の土色がみられる部分が数多く確認できた。しかしこれらは不整円形で大きさも様々であり、断ち割ってみるといずれも断面形状が整っておらず、深さも5cm程度に収まるものであった。そのためこれらはいずれも自然に生じた窪みや樹木の痕跡であると判断した。遺構と認定したのは以下で記述する段状遺構、土坑SK1、ピットSP1の3基のみである（第10図）。このうち試掘調査時に溝と認識されたものはSK1である。試掘時に土坑と認識していた部分は、掘削の結果人為的な遺構ではなく前述した類の自然の窪みであると判断した。

1　段状遺構（第14図、図版第6）

調査区中央南端で尾根主軸に平行する段状の地形を確認した。自然に形成されたものとは考えれない形状と、この部分に自然石（山石）が集中して見られることから、段状遺構とした。尾根筋の東側を削り出すことにより形成され、最大で約70cmの高さが生じている。現状で4.0mの長さがあり、南側の調査区外へ続いている。自然石は10～20cm程の大きさのものが主体で、分布は不規則である。調査区内には同様の自然石が認められたが、その分布は段状遺構とその前面の尾根筋上に集中している（第00図）。また、調査の最後にトレンチを入れて遺構検出面以下の堆積について確認した際に、地山中にも同様の自然石が散在する状況も確認している。よって段状遺構にともなうこれらの石も全て自然に存在したものである可能性を残す。



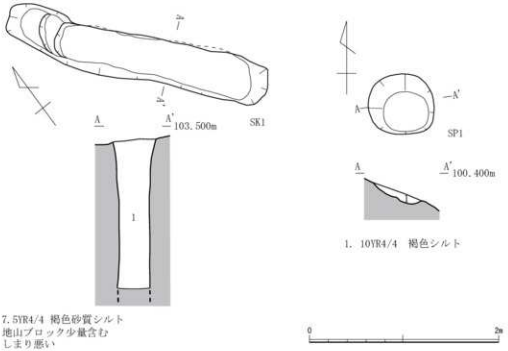
第14図　段状遺構実測図（縮尺1/40）

2　SK01（第15図、図版第6）

尾根筋中央の段状遺構の北側に存在する。試掘調査では深さ70cmほどの溝と認識されていた遺構である。周囲を精査した結果、長さ2.8m、幅0.5mの長方形を呈する土坑となった。最初に試掘調査時の埋め戻し土を除去したところ、底面には埋土と同様の土層があり、未だ地山に達していないと判断されたため、さらに掘り下げた。だが、検出面からの深さ150cmに達した高さでも埋土に違いは認められなかった。ピンポールを刺した感触では最低でもあと40cm程度は同様な柔らかい土が堆積しているように思われた。しかし、人力での掘削が困難な深度となり、ほかに掘削する現実的な手段もなかったことから、それ以上の掘削は断念した。遺構の形状は平面形は両側辺がほぼ直線的になる長方形である。西側の立ち上がりのみ上部約60cmの範囲で3段の階段状の造成があった後にほぼ垂直に掘り込まれているが、それ以外の3方向の立ち上がりはほぼ垂直なものである。埋土は基盤層が固くしまっているのに対して先述したように柔らかい土で、掘削も容易であった。

3　SP1（第15図）

東側斜面で検出した。自然の窪みと判断したものと同様であったが、これのみ方形に近い平面形であったため人為的なものの可能性を考慮して遺構とした。法量は長さ75cm、幅67cm、深さ10cmである。



第15図　SK1・SP1実測図（縮尺1/40）

第５章　まとめ

１　堂山城跡

今回の調査によって、本遺跡の中世山城は13世紀代に構築され、その後利用され続けた可能性が高いものと判断する。第２章でもふれたように、この結果は波多野氏が13世紀に地頭として被官し、当地に定着化した初期の段階から、本遺跡を含め館周辺に防御施設を構築したことを示すものであると考える。中世前半段階の波多野氏館が現在の位置にあったかどうかは議論の余地が残るが、少なくとも本遺跡の直近に位置することは疑いない。現在のところ、本遺跡よりも北側の山裾側では山城関連の施設は確認できない。堀切の前に曲輪を配した本遺跡が山城の先端部分に当たるものと思われる。なお、第４図の南側調査範囲外には、次の曲輪と考えられる平坦面が存在しており、城山山頂へと続くこの尾根筋が波多野城の一角を占めていたことは疑いない。

曲輪については、土師器壺の存在からも、盛土や前方後円形に近い溝の配置からも古墳であった可能性が高いと判断できる。しかしながら、山城構築段階の削平によってその痕跡の多くは失われたと推定される。前方後円墳であった場合、墳丘長は約22ｍ、円墳であった場合は直径12ｍ程度の規模であったと推察できる。

２　谷口西谷古墳群

今回の調査の結果、当初の想定とは異なり、古墳・墳墓に関わるような遺構・遺物は確認することができなかった。また今回確認できた遺構からも遺物が出土していないため、これらの年代や性格を明らかにする事もできなかった。

前述したように調査地の南北には古墳状の高まりが存在するが、前節までに述べたように両者に挟まれた空間地には関連する考古学的な痕跡は希薄であった。両古墳の間で時期や性格の差異があった可能性もあるが詳細は今後の調査の進展が必要である。

写　真　図　版

図版第一　遺跡（堂山城跡）

(1) 遺跡遠景（北より）

(2) 調査区全景（南より）

図版第二　遺構（堂山城跡）

(1) SX1・SK3（東より）

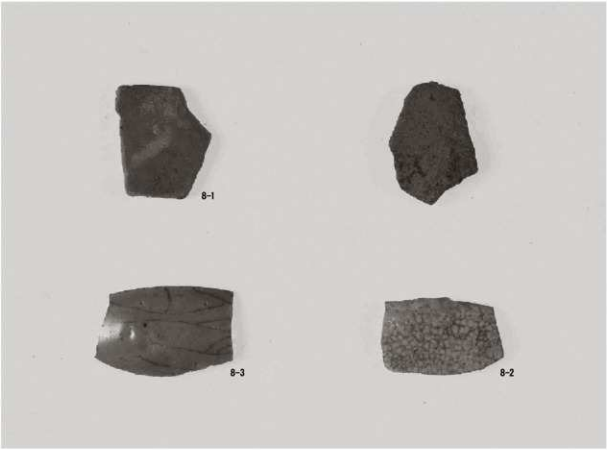
(2) SD1土層堆積状況（東より）

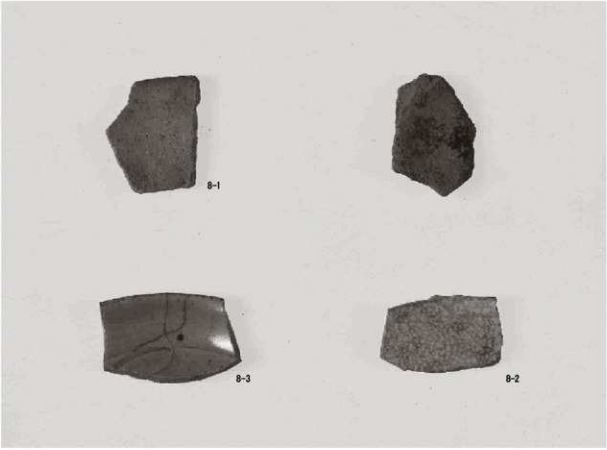
図版第三　遺構（堂山城跡）

(1) SD5・6（北東より）

(2) SD7（南東より）

図版第四　遺物（堂山城跡）　土師器・白磁





図版第五　遺跡（谷口西谷古墳群）

(1) 調査前全景（北より）

(2) 調査前全景（南より）

図版第六　遺構（谷口西谷古墳群）

(1) 段状遺構（東より）

(2) SK1（東より）

報告書抄録

ふりがな	どうやまじょうあと　たにぐちにしたにこふんぐん
書名	堂山城跡・谷口西谷古墳群
副書名	中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査15
巻次	
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第154集
編著者名	宮崎　認　　杉山拓己
編集機関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所在地	〒910－2152　福井県福井市安波賀町4－10　　TEL 0776－41－3644
発行年月日	西暦2014年3月14日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査 面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
どうやまじょうあと 堂山城跡	よしだぐんあいづいけ 吉田郡永平寺 まちたにぐち 町谷口	18322	15120	36° 5′ 12″	136° 20′ 22″	20110701 ～ 20111130	930㎡	記録保存 調査
たにぐちにしたにこふんぐん 谷口西谷古墳群	よしだぐんあいづいけ 吉田郡永平寺 まちたにぐち 町谷口	18322	15121	36° 5′ 12″	136° 20′ 29″	20110901 ～ 20111031	350㎡	記録保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
堂山城跡	城館跡 その他	室町時代 古墳時代	堀切・溝 土坑	白磁・ 土師器	古墳を改変したと考えられる中世山城の堀切・曲輪を検出。
谷口西谷古墳群	古墳		段状遺構 ・土坑		遺物が確認できず時期不明。

要約	堂山城跡では、古墳を大幅に改変して造られた室町時代の遺構・遺物を確認した。波多野城跡の出城の一つと考えられる。 谷口西谷古墳群では、遺跡の中心部ではないため、大きな成果は得られなかった。

福井県埋蔵文化財調査報告　第154集

堂山城跡・谷口西谷古墳群

－中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査　15－

平成26年3月 1 日　印刷
平成26年3月14日　発行

発行　福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
〒910－2152　福井市安波賀町4－10
印刷　株式会社 国府印刷社
〒915－0802 福井県越前市北府2丁目11－16